

トピックス

◆講演会「食による生体リズム調節と健康の科学」

食品の生体調節機能に関する研究の一つとして、サーカディアンリズム（概日リズム：約一日の周期）への食の影響が注目されています。そこで、食品機能性研究センターは、日本食品科学工学会関東支部会に協力する形で、右側に示したような講演会を企画しました。

日常生活のリズムの乱れが、生活習慣病など体調不良の原因になるとされるが、このリズムの乱れを、規則的な食生活の実践により、正常に戻すことができるとする早稲田大学柴田教授や、睡眠の質を改善する食品の探索を実験動物を用いて集中的に行っている大阪バイオサイエンス研究所分子行動生物学部門の黄副部長、食事パターンが胎児の脳や臓器に影響を与えるとのショッキングな研究成果を発表された東北大学病院の太田助教に、それぞれご講演をお願いしております。

これらのご講演は、食生活が乱れがちな現代社会の中で、それを正すための科学的エビデンスを提供するものとして大いに期待されているものであり、国民の健康的な生活の確保に向け、今後この分野が大きく発展することを期待しています。皆様の積極的な参加をお願いいたします。（T.T）

食による生体リズム調節と健康の科学

平成20年11月22日（土）  
つくば国際会議場（中ホール）

プログラム

- 13時30分 挨拶  
日本食品科学工学会関東支部 支部長 竹中哲夫
- 13時40分 睡眠の分子機構を探る  
(財)大阪バイオサイエンス研究所 副部長 黄志力
- 14時40分 食事や食品成分による時計遺伝子発現リズムの制御作用  
早稲田大学先進理工学部教授 柴田重信  
(15分休憩)
- 15時55分 妊娠母胎の食事パターンが胎児の脳・臓器に与える影響  
東北大学病院周産母子センター助教 太田英伸

入場料：会員1500円、学生500円、非会員2000円

懇親会費：5000円（事前申し込み必要）

申し込み：玉川大学農学部生命化学科内（竹中教授）

FAX:042-739-8854

Email:takenaka@agr.tamagawa.ac.jp

ミニ解説コーナー

◆食と体内時計

地球上の生物は、地球の自転に依存し24時間の周期からなる規則的な生活を送っているが、生体に内在する時計の周期は、種によって異なるらしい。人間は、約25時間の内在時計を持ち、暗所でのみ生活すると1日に1時間だけ時間が

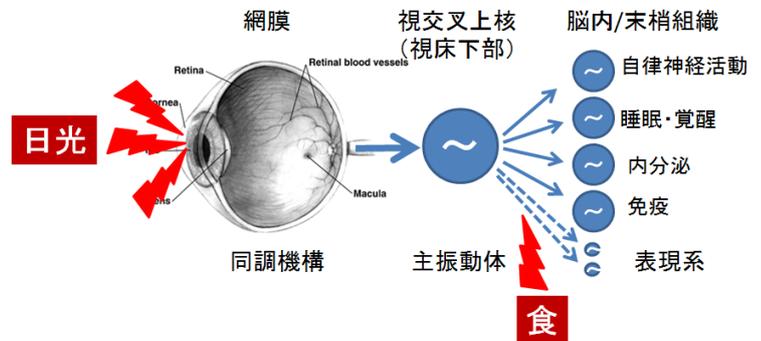


図1. 体内時計による生体機能の支配の概略

狂ってしまう。このズレをリセットする方法として、図1の「日光」と「食」が機能しているものと考えられている。

これまでにこの研究分野から、最も適切な時間に医薬品を投与する(図2)学問分野として「時間薬理学(Chronopharmacology)」が誕生しているが、食品についても同様の視点から、地球生命体である我々にとって望ましい食生活のあり方に関する科学的な根拠が見いだされることを期待したい。

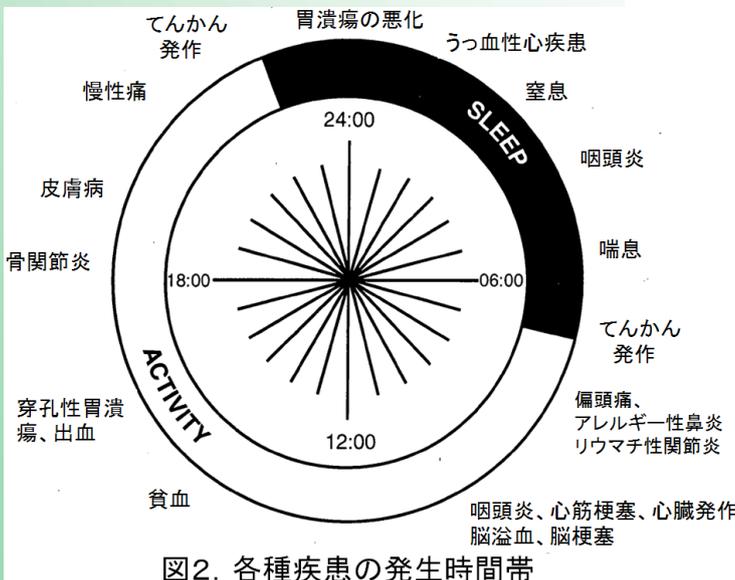


図2. 各種疾患の発生時間帯

問い合わせ先:食品総合研究所食品機能研究領域  
川村・津志田(029-838-8011)